

■トピックス2

VR文化フォーラム in 鹿児島 参加報告 鹿児島一周：文化と探検

安藤英由樹（大阪大学）



2013年の年が明けたばかりの1月12日、13日に鹿児島を巡るVR文化フォーラムが開催された。主なプログラムは、鹿児島市桜島にある京都大学防災研究所、縄文の森、霧島いわさきホテルでの講演会、霧島アートの森、長島美術館、鹿児島県文化センター宝山ホールでの講演会と盛りだくさんであった。1月12日は鹿児島空港、鹿児島中央駅の集合場所にて参加者をバスでピックアップした後、鹿児島港からバスごとフェリーに乗って桜島へ移動。まずは第一の目的地である京都大学防災研究所に向かった。フェリーから桜島に徐々に近づいていくところで、桜島から黒煙が上がる瞬間が見えた。まさに噴火している様子であり、今もなお日常的に活動している様子を目の当たりにした。防災研究所では味喜先生(京都大学)の桜島噴火に関するお話をしていただいた。桜島には現在も5000人程度の住民がおり驚異的な自然とともに生活していることに驚かされた。また、円筒に煤をつけた紙に針で引っ掻いて記録する地震記録器が今でも現役で使われていることに感動した。もちろんデジタル化もしているが保存・いつまでもフォーマットが変わらないなどの点からこれからも続けていくとのことで、デジタルとはなかなか信頼されないものだ改めて感じた。その後、鹿児島県上野原の縄文の森に移動した。縄文の森展示館では鹿児島県内各地から見つかった数千年前の土器や石器等の遺物が惜しげも無く展示されている。縄文という

言葉には原始的な文化レベルのイメージを持っていたが、実際に発掘物を見ると現在から見ても、ものすごい精度、技術、創造性を持った文化であったことがよくわかった。また、屋外には竪穴住居が再現されており、夏には縄文時代を体験するキャンプなども行われているとのことである。機会があれば是非参加してみたい。

その後バスにて鹿児島県の北部である始良・伊佐地域霧島市の霧島いわさきホテルへ移動。到着した頃にはすでに日が暮れていた。霧島いわさきホテルでは池内先生(東京大学)と伊福部先生(東京大学)の講演が行われた。池内先生は屋外ギャラリーとe-Heritageプロジェクトについてご講演なされた。文化遺産をデジタル化する試みとして、保存という観点からいつなくなるかわからないアンコールトム、バイヨン寺院をデジタルモデルとして残さなければならないが、いかんせん大きすぎる。そこで、気球センサや屋台センサを開発し、それを駆使して実現したという話題である。特に、日本の研究者がそこを毎度訪れるのではなくカンボジアの現地の人が引き続き行うという仕組みの実現に感銘を受けた。また、データの活用としてサイバー考古学についても触れ、仏教からヒンズー教に変わっていった歴史について新たな知見が得られたことなど大変興味深い内容であった。伊福部先生は「縄文の響き、平成の響き」というタイトル(お題)から、縄文人が樺太アイヌになったと興味深い持論を展開され



黒煙があがる桜島（フェリーから）



1月12日講演会場の様子（霧島いわさきホテル）

た。アイヌの村で育った伊福部先生の叔父伊福部昭氏の熊祭の研究において、文字の文化がないアイヌでは音楽は歴史を語り継ぐための特別なものであり、伊福部先生自身も叔父の言葉や蠟管レコードの再生技術の研究を通じてこれを体感し、人々を不安にさせないように警戒させ、また安全に導く音である緊急地震速報に採用されている音のルーツは縄文にあり、そして平成に生かされているという奥の深い内容でした。この講演会には鹿児島大学の川崎研の学生も多数参加され、工学ではなく文化という切り口から研究を観るといこの講演は研究の本質的な意味という観点から刺激になったに違いない。

1月13日午前、VR学会・論文誌のインパクトのある表紙でおなじみの河口先生（東京大学）が館長として就任された霧島アートの森を訪れた。特に野外美術館としての展示は素晴らしく、展示されている作品はアーティストを招聘し自ら展示場所を選び、そこで制作された現代彫刻であり、自然も素材のひとつとして作品が成立しているところには感動を覚えた。あいにくの雨ではあったが、また、家族連れで訪れたい場所である。その後、ぐるっと鹿児島市の南西を經由して、鹿児島市街地にある長島美術館に移動し、絶景の眺望のはず（残念ながら雨のため）のレストランカメラアで昼食後、長島美術館館長に美術館内を案内していただいた。素晴らしいコレクションが数多く展示されているが、特筆すべき事は白薩摩・黒薩摩の展示であろう。特に白薩摩焼においては、幕末から明治初期に掛けて一度海外輸出されたものが時を経て日本に買い戻された“里帰り品”が数多く展示されており、ラベルを見るとどこの国から還ってきたものかわかる。また、沈壽官の見事な香炉には驚かされた。さらに、鹿児島県文化センター宝山ホールにおいて開催されている「河口洋一郎の宇宙探検〜かごしまルネサンスに向けて」の展示会場にて、河口先生の映像と精矛神社の宮司でもある島津義秀さんによる薩摩琵琶の演奏のなかで白鳥バレエの白鳥五十鈴さんが舞うという「CGアート+薩摩琵琶+バレエとの初コラボレーション」企画が実演され、なんとも不思議な空間となった。その後



九州伝統工芸（沈壽官）とコラボ

この3人のトークとなり、今回のコラボレーションではお互いが主張し混ざらず尖ったものがぶつかり合い、そこで磨かれて自然とバランスよくそれぞれの美しさが映えるという、ある意味サバイバルが必要だといまとめ（注：一部私の解釈が入っています）にはいかにも河口先生らしい表現に対する感覚だと思った。その後、今回河口先生とコラボ作品を制作された十五代目の沈壽官さんが挨拶なさり、次のテーマである、「九州文化とデジタルミュージアム」について竹田先生（九州大学）、廣瀬先生（東京大学）、から講演があった。竹田先生は九州大学総合研究博物館館長として、従来の博物館展示に竹田先生専門のVR技術を駆使することで、博物館が抱えている問題点をいかに解決したかという話題、そして博物館をアピールする「九大ミュージアムバス」の実現にまつわるエピソードについて講演された。廣瀬先生は鉄道博物館でのプロジェクトを踏まえて、九州の鉄道には独自の文化がありそこには九州を盛り上げるための素材がたくさんあると「ななつ星」（自然・食・温泉・歴史などを楽しむことを目的としたクルーズトレイン）などを例に上げ説明なされた。そして、河口先生は失われつつある伝統工芸とアートをぶつけることが新たな展開に繋がると具体例を示し、鹿児島の来場者を勇気づける内容となった。

今回の鹿児島での文化フォーラムは、VR研究が社会にどう還元されるかを考える上で私には非常に有意義であった。このようなイベントを企画なされた相澤清晴先生（東京大学）、小黒久史氏（凸版印刷）に感謝し、この報告を締めくくる。



CGアート+薩摩琵琶+バレエ



1月13日講演の様子（宝山ホール）